

## 第4章 スポーツ

### コツを教える

「逆上がり」「跳び箱」「二重跳び」「速く走る」「ボール投げ」、これらは小学生の苦手な運動です。クラスに必ず遅い、できない子が二、三人はいる。先生に叱咤激励されても、うちが明かない。それは、なぜか。コツを知らないから、できないのです。コツがつかめれば苦手を克服できます。コツは、自分でつかむのが一番いいのですが、それは、なかなか難しい。

小学生の場合、学校の体育の時間に先生から教えてもらう。しかし、適切なコツを伝授できないので泣く子が出てしまう。スポーツ嫌いが増える。自分の教え方が悪いからできないのだと反省する先生は少ない。コツを教えられない先生から、悪い評価点をもたらうのでは、できない子はたまったものではない。

児童を泣かせないためにも、教育のプロである先生は、適切なコツを教える必要がある。日々研鑽を積んでほしいものです。

スポーツは体力勝負なので、体の大きさも関係するだろう。小さい私は、どれも苦手だった。しかし、適切なアドバイスがあれば、もう少しスポーツが好きになっていたかもしれない。

## 重量挙げ

重量挙げ（ウエイトリフティング）、この競技ほど、おかしなスポーツはない。だれが一番重いバーベルを持ち上げる事ができるか、力の強さを争う競技だ。

### 第53回「かながわ・ゆめ国体」を観る

「かながわ・ゆめ国体」があった時、松田町民文化センターは重量挙げの会場になった。昼頃、観に行った。ステージで競技が繰り広げられていたので驚いた。私は、コーラスでステージに立った事があったので、ピアノはどこに運んだのかと心配をした。

会場には二人の女性の観客がいた。しばらくすると「お昼だから、もう帰ろう」と席を立つてしまった。広い観客席に私一人になった。

ステージ上では次々に選手が競技を行っていた。バーベルを下ろす際にはステージがドスンと鳴った。審判は、白いシャツにズボンを履いた女性で、白い手袋をし、きびきびと判定を下していた。三つのランプが点くと合格。次第に重くなり、持ち上げる前に、ヨロヨロとして一つもランプが点かない人もいる。

ガラーンとした観客席での観戦は、すぐ厭きてしまった。試合は、同じような選手が次々出て来て、延々と続いていた。私も十二時半になったので、受付で記念品をもらって帰宅した。もっと大勢でワイワイ言いながら観戦したかった。

### 「全国大会」を観る

「かながわ・ゆめ国体」が終わって、一年後のある日の夕方、松田町の体育館で「全国大会」が行われていた。私は買い物帰りだったので、荷物を積んだままの自転車を外に置いて、体育館の中に入って見学した。今度は、関係者や見学者が体育館にいっぱいいて、「ヤー！」「よし！」「それ！」「いいぞ！」と応援をしていた。活気に満ちていた。審判は白いシャツにズボンを履いた男性で、白い手袋をし、きびきびと判定を下していた。

最初は立って観ていたが、次第に力が入って、空いている一番前の席に座った。すると、時々役員や選手が私の隣りに座っている大柄の男性に挨拶に来た。中には「アジア大会では、お世話になりました」とか、「今日はご苦労さんです」と言う人もあり、そのたびに、私は「どうも」とか、「ありがとうございます」「どういたしまして」と言っただけで頭を下げた。隣りの男性は、私とは対照的に腕組みをして「うむ」とか「ああ」と、素気なかった。

表彰式があった。女子の部では広島大学の学生が優勝だった。遠くから来ている事に感動した。最年長の優勝者は、痩せた背の高い人だった。骨と皮のような、今にも折れてしまいそうな人だったので、重いバーベルを持ち上げられて、すごいとさらに感動した。感動に次ぐ感動だった。

時計を見ると夜の七時だったので、ビックリして帰宅した。外に置いたままにした自転車と荷物は無事だった。いつまでも感動が残っている。楽しかった。ところで、私の隣りに座っていた男性は、会長とか理事長とか重要な人だったかもしれない。

## ハンマー投げ

ハンマー投げ、この競技も、おかしなスポーツだ。ハンマーは七・二六キロもある鉄の球で、ボウリングで一番重いボールとほぼ同じ重さ。これを、だれが一番遠くに投げられるかを争う競技だ。二〇〇四年のアテネオリンピックの金メダルは室伏広治選手だった。二〇一一年の世界選手権では八十一メートル二四を投げて初優勝。世界一だった。

室伏選手は、百八十七センチ、百二キロの体を四回転させて勢いをつけ、力を爆発させる。そんな彼も、平成十年（一九九八年）の『かながわ・ゆめ国体』の頃は、まだ無名の選手だった。私は、平成十七年（二〇〇五年）三月二十五日、大井町社会福祉協議会事業の「生きがいはほえみ大学」の講師をした時、「かながわ・ゆめ国体で、日本新記録を出したハンマー投げの室伏選手は、すばらしかったですね。若い人の活躍を、みんな応援しましょう」と言ったが、「室伏ってだれ？」という程度の反応だった。私は、室伏選手のファンで応援する一人です。

国体前のある日、テレビで、もくもくと練習に励む室伏選手を観た。一日に百五十回以上ものハンマーを投げる。何回か投げると自分でズルズル引きずって回収し、また投げる。その練習を

一投ごとに父親の重信（アジア大会五連覇）がビデオで撮影し、指導する。涙ぐましい努力を知っていたので、「すばらしい活躍でしたね」と言ったのだが。

平成二十四年、三十七歳になった室伏選手、その名前を世界中の人が知っている。「鉄人」と呼ばれている。私は、ロンドン・オリンピックでの活躍を期待している。人々に手をふる室伏選手の手笑顔を見たいと思っている。

そのロンドン・オリンピックでは、室伏選手（ミズノ）は七十八メートル七一で三位、銅メダルを獲得した。アテネでの金メダル以来二大会ぶりのメダル。北京オリンピックは五位入賞だった。今大会を最後に、引退を表明していたので、会場を去るのがなごりおしそうだった。金メダルはハンガリー、銀メダルはスロベニア、銅メダルは日本だった。

## バスケットボール

『かながわ・ゆめ国体』の時、大井町はバスケットボールの会場になった。役場の並びに大きな体育館ができた。私はバスケットボールに全く興味がなかったので試合を見学に行く事はなかった。

ある晩、近くのマーケットに買い物に行った。そして奇妙な光景に出会った。細くて背の高い男女の若者らが大勢買い物に来ていた。みんなが汚れたジャージ（ユニホームのシャツ、運動着）を着ていた。ズボンの裾が切れて、引きずれている人もいる。レジには、手に手にスナック菓子

やジュースなどのおやつ類を一つ、二つと持って並んでいた。小さい私は、背の高い若者に囲まれ、金しばりのようになった。その背の高さは見上げるようだった。店員さんに「この人たち、なあに？」と言うと、「バスケットボールの選手じゃないですか」という返事だった。「なるほど」。合宿中、練習の後、一斉に買い物に来たのだ。

小さくて足が短い私は、この時のようすを今でも時々思い出します。すると息が止まりそうになります。

## 相撲

相撲の放送が始まると仕事が手につきません。相撲が終わっても興奮がいつまでも続いていきます。

### 「相撲」夫婦の会話

「あのような取り組みになったら、前にドンドン攻めて行って、押し出さないといけない。時間のかかりすぎ。勝ったからといって、いい勝負だったというわけではないわ」「すみません」「謝る事はないわ」「あなたが、そんなに相撲が好きだったとは知りませんでした」。

「好きなスポーツは、相撲の他に水泳、フィギュアスケートです。勝負の時間が短いからです。嫌いなスポーツはレスリングやカーリングです。「オー！」とか「ヤァー、ヤァー！」とか大声

を發して野蠻で下品です。母は、剣道やボクシングが嫌いでした。『殴り合いはスポーツではない』  
と言っていました。

### 「行司」夫婦の会話

「知ってる？ 大相撲の立行司、第三十七代・木村庄之助が、今日（平成二十七年三月十六日）  
誕生日なんだって、昔は、六十五歳になった時点で定年退職だったけれど、今ではその場所を勤  
めてから退職するんだって、粋なはからいだわ。この道五十年ということは、十五歳から行司一  
筋ってことよ。感動だわ」。すると夫がつまらない事を言った。

「その事なら知っていた」「どうして？」「相撲の一日目に、解説の人が言っていたのを聞いた」  
「なんだ、そうですか。私は今知ったので、感動している所よ。すばらしいわ」。夫は、さら  
に  
つまらない事を平気で言った。

「行司差し違えというのがあるでしょ。差し違えると、給料が減るのかな？」「給料がどうなる  
かなんて知らないわ。差し違えないように短刀を差しているのよ。差し違えたら切腹するとい  
うぐらいの意気込みで裁いているのよ」「そうでしたか」。

誕生日のこの日は、白鵬対碧山を裁いた。白鵬が簡単に勝った。千秋楽、行司最後の一番は白  
鵬対日馬富士。熱戦の末、白鵬が勝った。白鵬は落ち着いていた。強い。優勝決定戦はなく、白  
鵬が三十四回目の優勝だった。三十四回も優勝するということは、本当にすばらしい事です。

## 相撲解説者

相撲の解説者の北の富士勝昭さんの事が気に入っている。ある時、正面の解説が北の富士さんで、向正面の解説が舞の海秀平さんだった。アナウンサーが「今のは、電車道一直線でした。あつけない取り組みでしたね」と言うと、北の富士さんが「相手の足がもつれただけで、両者一つも良い所がなかったですね。こんなのは相撲とは言いません。第一、見に来てくれているお客さんに失礼ですよ」「どうすればよかったですよね」「稽古をしないからいけない。最近稽古嫌いが多すぎますね」。

次にアナウンサーが「舞の海さんは、どう見られましたか」と話しを振った。「立ち合い、相手をよく見て、もつと攻めない。低く当たって中に入って右の腕（かいな）の方に体を押しつけて出て行く。そして外掛けをかける。まわり込むかたちで投げを打つんです」と言った。それを聞いた北の富士さんが、「舞の海だったらできますがね」と言った。舞の海さんもアナウンサーも笑った。私は、この一言で北の富士さんが気に入った。

次の取り組みで、「この力士は下半身が硬いね」と北の富士さんが言った。アナウンサーが「下半身が硬いのは、やはり稽古をしないからでしょうか」と言った。すると、「体が硬いのは、いくら稽古をしても直らないですね」と北の富士さんが平然と言つてのけた。「そうですか、稽古をしてもダメですか」。私は手をたたいて笑った。これほど面白い解説者は他にいない。

私は、大鵬や柏戸が活躍していた頃からの相撲ファンです。「張手」「喉輪」は嫌いな技です。これを使って勝つ相撲取りの品格が問われます。組んでから豪快に投げ飛ばす、真つ向勝負を期

待します。

平成二十四年七月二十二日、名古屋場所の千秋楽の解説は、正面が北の富士さんで、向正面の解説は舞の海さんだった。大関日馬富士（モンゴル出身、伊勢ヶ浜部屋）が横綱白鵬（モンゴル出身、宮城野部屋）との全勝対決を制し、六場所ぶり三度目の優勝を果たした。アナウンサーが「日馬富士は次の秋場所で横綱昇進に挑むわけですが、いかがでしょうか」と言うと、北の富士さんが「今場所のような、張ったり、突いたり、飛んだりでは、綱は難しいんじゃないですか」と言った。日馬富士は「全身全霊で頑張ります」と意欲を語った。

平成二十四年九月二十三日、秋場所（両国国技館）の千秋楽の解説は、正面が北の富士さんで、向正面の解説は舞の海さんだった。全勝の大関日馬富士が、一敗の横綱白鵬と対決した。そして日馬富士が勝って二場所連続全勝優勝を果たした。

アナウンサーが「力の入る相撲でしたねえ、舞の海さん、目をまわしていませんか、大丈夫ですか?」と聞いた。舞の海さんが「いやあ、疲れましたね。すごかったですね。これはもう、横綱昇進が確実ですよ。小さい体（幕内で二番目の軽量・百三十三キロ）でも努力をして精進すれば強くなれる事を証明してくれましたね。希望を与えてくれましたよ」と言った。

優勝を予想していなかった北の富士さんは、「日馬富士が、化けましたね」と言った。「稀勢の里（大関）なんかは、もっと待っていないで、自分からいろいろな所に出稽古に行かなければだ

めだね。稽古がたりない」。モンゴル出身の相撲取りの上位対決が、舞の海さんも北の富士さんも気に入らなかつたようだ。

アナウンサーが、「日馬富士は来場所も全勝を延ばす可能性がありませんね」と言うと、北の富士さんは返事をしなかつた。その後「上までのほり詰めたら、そこで終わり、後がないですからねえ。やめるしかない。頑張つてほしいですね」と言った。私は、優勝者の日馬富士を前にして、この失礼なコメントに驚いた。でも、実際はそうですよ。

表彰式で野田総理が総理大臣賞を渡す際、「久しぶりに、鳥肌が立つほどの取り組みでした。おめでとございます」と言った。本当に歴史に残る立派な相撲だった。日馬富士は全身全霊で戦い「第七十代横綱」という夢をつかんだ。

横綱伝達式では「横綱を自覚して、全身全霊で相撲道に精進します」と口上を述べた。

平成二十五年一月二十七日、初場所（両国国技館）の千秋楽。二場所ぶり五度目の優勝を決めていた日馬富士が、白鵬との横綱同士の一番を寄り切りで制し、昨年秋場所以来三度目の全勝優勝を果たした。白鵬は十二勝三敗だった。

平成二十五年三月二十四日、春場所（大阪府立体育会館）の千秋楽。白鵬が九度目の十五戦全勝優勝を果たした。これは双葉山、大鵬を上回る記録で、歴史に名を刻んだ。熱戦となった千秋楽結びの一番は、日馬富士を上手投げで仕留め、白鵬の強さが際立った。歴代単独八位の幕の内

六百五十勝。「優勝回数マジック8が点灯ですかね」と笑う白鵬は、まだ二十八歳だ。期待したい。表彰式では、故・大鵬に黙とうをすることを忘れなかった。会場の相撲ファンからは、大きな拍手と「白鵬、ありがとう」の言葉がかけられた。日本人は、このような事に弱い。私はテレビの前で感動して泣いた。白鵬の目にも涙があった。

## 競泳

ロンドンオリンピック競泳女子四百メートルリレー、日本は決勝に進んだが、最下位の七位に終わった。七位入賞を果たした。金メダルはオーストラリア、銀メダルはオランダ、銅メダルはアメリカだった。スウェーデンは失格。

日本のメンバーは、第一泳者の上田春佳（東京スイミングセンター、二十四歳）、第二泳者の松本弥生（日本体育大学大学院、二十二歳）、第三泳者の内田美希（スウイン館林、関東学園大学附属高校、十七歳）、第四泳者の伊藤華英（セントラルスポーツ研究所社員、二十七歳）の四人。インタビュに「他のチームが強かった」と内田選手が語った。

NHKのアナウンサーが何度も「競泳女子四百メートルリレー」と「競泳女子四百メートルメドレーリレー」を間違えて謝った。

その、ロンドンオリンピック競泳女子四百メートルメドレーリレー、日本は全体の二位で決勝

に進んだ。メンバーは、第一泳者・背泳ぎに女子百メートル銅の寺川綾（ミズノ、二十七歳）、第二泳者・平泳ぎに二百メートル銀と百メートル銅の鈴木聡美（山梨学院大学、二十一歳）、第三泳者・バタフライに加藤ゆか（東京SC、二十五歳）、第四泳者・自由形に上田春佳（キックマン、二十四歳）で挑んだ。決勝では日本新記録で三大会ぶりの銅メダルを獲得した。金メダルはアメリカ（世界新記録）、銀メダルはオーストラリア。銅メダルは日本（日本新記録）だった。

競泳男子四百メートルメドレーリレーでは、日本は銀メダルに輝いた。合言葉は「（北島）康介さんを手ぶらで帰らせるわけにはいかないぞ」。メンバーは、第一泳者は背泳ぎに二百メートル銀、百メートル銅の入江陵介（イトマン東進、二十二歳）、第二泳者は平泳ぎに北島康介（日本コカ・コーラ、二十九歳）、北島選手は一番で泳ぎ、次につないだ。第三泳者はバタフライに二百メートル銅の松田丈志（コスモス薬品、二十八歳）、第四泳者に自由形の藤井拓郎（コナミ、二十七歳）の四人。金メダルはアメリカ、銀メダルは日本、銅メダルはオーストラリアだった。北島選手は日本の競泳で初の三大会連続メダリストとなった。今大会のロンドンでは、百メートル五位入賞、二百メートル四位入賞だった。「思い出深いオリンピックになった。全ての人に感謝したい」と北島選手は言った。好青年です。

## ロンドンオリンピック

ロンドンオリンピックは、平成二十四年七月二十七日から八月十二日までイギリスのロンドンで開催された、第三十回夏季オリンピック。二百四の国と地域から約一万一千人が参加した。

朝七時からの『NHK ニュースおはよう日本』と、夜七時からの『NHK ニュース7』でロンドンオリンピックの結果を観た。

### 「体操」夫婦の会話

「体操は、クルクル、クルクルすごいね」「よく目がまわらないね」「見ている方が目をまわすね」「着地なんか、止めなくていいよね。足を痛めるわ」「あんなに細い棒の上での演技、よく落ちないね」「平均台なんて競技、だれが考えたのかしら。細すぎだよ」「緊張するね。力が入る」「力を入れて見ていたから、疲れた。休もうか」「そうだね」。

### 「水泳」夫婦の会話

「水泳は、よく曲がらないで泳いで行けるね」「他の選手の方に曲がって行ったら妨害になってしまうよ」「きつとプールの底に線が引いてあるのよ。それを見れば、まっすぐに泳げる」「でも、今やっている競技は背泳ぎだよ。天井に線が引いてあるのかな」「それは、ないでしょう」「男子は、みんなムキムキマンだね」「キャー、すごいね」「そうだね」。

## 「柔道」夫婦の会話

「柔道は、ルールがよくわからない」「かけ逃げというのは何かしら」「さあね」「組み合っている、急に力を抜いて、やめたりするね。なぜかしら」「わからない」「一本背負い投げなどの技での勝負なら日本が強いけれど、抑え込みのような体力勝負では、いくら練習をしても、外人にはかなわないと思うね」「これからは、技以上に力強い柔道が求められる。お家芸だった柔道は、今や世界の競技になった。相手のパワー・腕力に、日本人が勝つのは難しくなるね」「そうだね」「銅メダルが二人もいるわ。旗判定で負けた人も、銅メダルだわ。なぜかしら」「わからない」「きつと、何かルールがあるんだわ」「銅メダルは二人と決まっているのでしょうか」「そうだね」。

## 「バスケット」夫婦の会話

「バスケットには日本は出場していないね」「アメリカは、全米オールスターで、平均身長が二メートル、平均年齢は二十五歳と言っていたわ」「そりゃ、すごい。話を聞いただけでも勝ち目がないね」「そうだね」。

## 「重量挙げ」夫婦の会話

「女子重量挙げの三宅選手は、小さくてかわいいね」「私と同じ大きさよ」「あなたも、重量挙げをやったら」「見ているだけで、力が入るね」「あーあ、疲れた。自分で持ち上げたように疲れた」「腰にきたよ。膝もいたい。イテテテテ！」「そうだね」。

### 「アーチェリー」夫婦の会話

「アーチェリーは、年を取っても続けられそうな競技だね」「じゃあ、やってみるか」「でも、年齢と共に目も老化してくるわ。簡単そうに観えるだけよ」「そうだね」。

### 「卓球」夫婦の会話

「卓球のチキータって何かしら」「さあね」「踊っちゃうよ」。

### 「ハンマー投げ」やり投げ」夫婦の会話

「ハンマー投げや、やり投げは、どこに跳んで行くか、わからないわ。審判に当たったら大変よ」「みんなが跳んで来る方向を見ているから大丈夫さ」「でも、当たるかも知れないから審判は命がけだね」「そうだね」。

### 「レスリング」「ボクシング」夫婦の会話

「レスリングやボクシングは、オリンピックの種目から外してもらいたいわ。掴み合い、殴り合い、蹴り合い、喧嘩のようで見ていられない。いやだわ」「レスリングもボクシングも金メダルを取ったよ」「昔、おばあちゃんが、『剣道は、棒での殴り合いだから、いやだ。ボクシングも、レスリングも人のやることではない』と言っていたことがあるわ。おじいちゃんは、ボクシングや、レスリングをテレビで観戦するのを楽しみにしていたのよ。当時は、キックボクシングやレ

スリングが全盛期で、テレビ中継が毎晩のようにあったのよ。レスリングでは、古くは力道山、続いてジャイアント馬場、アントニオ猪木がいたわ。女子プロレスも人気だった。おじいちゃんは、寝転んで夜遅くまでテレビ観戦していて、そのまま寝てしまったりしたから、おばあちゃんに、いつも叱られていたわ。

### 「テコンドー」夫婦の会話

「テコンドーは、足で顔を殴るわ。それを皆で『頑張れニッポン！』と応援する競技よ。最低だわ。やめていただきたい」だんだん、あなたも言う事が、おばあちゃんに似てきましたね」「そうだね」。

### 「シンクロ」夫婦の会話

「シンクロは、どのチームもきれいで、ミスがわからないわ」「甲乙つけがたい」「練習は厳しくて、『プールの水を全部飲んだ』とか『プール一杯分の涙を流した』と言っていたわ」「御苦労さんだね」「そうだね」。

### 「新体操」夫婦の会話

「新体操もすごいね」「みんな美人ですね。どの人がいいかな」「足が細くて長い。フラミンゴのようだ。人間とは思えない」「つま先立ちで、ずっと演技している。よく疲れないね」「昔、フラフープが大流行したことがあったね」「買ってもらったわ。フラフープなら今でもできるわ」。

オリンピック出場はどうかしら?」「無理だね」。

あきれるほど次元の低い夫婦の会話が、テレビの前でいつまでも繰り返された。朝晩のNHKのニュース番組だけでも、オリンピックを堪能した。

## 質問

質問をするのは答えるより難しい。

### 「三宅宏美選手」へ質問

重量挙げ女子四十八キロ級で銀メダルを受賞した三宅宏美選手と、コーチの父・三宅義行(六十六歳)がロンドンのスタジオからテレビ出演した。

「銀メダル、おめでとうございます。今のお気持ちはいかが?」「ほっとしています。今度は笑って日本に帰れます」。アナウンサーが「お父さんを超えられましたね」と言うと、「はい、恩返しができなかった」。するとお父さんが、「もう、とつくに超えていますよ。オリンピックに三回も出てきた。」「親子でメダリストおめでとうございます」と言っでごまかした。

次に東京のNHK スタジオから男のアナウンサーが質問をした。「NHKアナウンサーの〇〇と申します。北京オリンピックの時、現地でインタビューをした事があります。覚えていらっ

「しゃいますか?」。するとロンドンのスタジオはシーンとなった。宏実選手のかわいらしい顔が、「へへへ」と笑った。目もクルルンとさせた。「うーん、かわいい」。宏実選手は北京オリンピックで出会ったと言っているアナウンサーを覚えていなかった。日本全国の人が、宏実選手がメダルにとどかず悔し泣きをしていた時、平気でインタビューしたのは、このアナウンサーだったのか。「許すまじー」と怒った。

◆三宅宏実選手は、初出場のアテネオリンピックは九位。大会前にぎっくり腰になった影響で入賞を逃した。当時、普段の体重は五十二キロ。北京オリンピックでは股関節の痛みを抱えながらの出場。メダルを取りやすい四十八キロ級に出場するため、三ヶ月で五キロ落とした。計量では四十七・三五キロしかなかった。無念の六位だった。現在の身長は一メートル四十六センチ、二十六歳、埼玉県出身。

「一回目にあげられたのが、勝利につながりました。一回目が勝負と思っていました。ロンドンを目標にしてやって来たのが成功でした」と、コーチのお父さんが淡々とインタビューに答えていた。一回目の試技、バーベルに向かう前の娘の耳元で、父は「これが勝負だ」とささやいた。中学三年で競技を始めて十二年、いつも父の助言に支えられてきた。父は一日七時間の猛練習につきっきりだった。

東京オリンピックで金メダルを受賞した三宅義信は、メキシコオリンピックでも連破をした。この時の銅メダルは弟の三宅義行だった。兄弟で表彰台上に上がった。今回、ロンドンオリンピックで銀メダルを受賞した宏実選手は、三宅義行の娘です。嬉しい銀メダルです。読売新聞は一面

トップに「父の銅より一つ上」と表彰式の写真を掲載した。

帰国した三宅親子は空港で大勢の出迎えを受けた。父親が先頭で、みんなに握手をしていた。嬉しそうだった。宏美選手も。それをテレビで観ていた夫が「おばさん世代には、三宅義行選手はヒーローだものね」と言った。

ハンマー投げの室伏広治選手、やり投げのディーン元気選手、体操の内村航平選手、卓球の福原愛選手、レスリングの浜口京子選手も親がいつもついている。

私は、ロサンゼルスオリンピック体操の金メダリスト具志堅幸司選手の一言を思い出していた。「僕の親は、僕の演技を見た事がありません」。具志堅選手は大阪府大阪市大正区出身。一九八四年のロサンゼルスオリンピックでは、個人総合と吊り輪で金メダル、跳馬で銀メダル、団体総合と鉄棒で銅メダルを獲得した。Wikipediaには、家族の事が一行も書かれていない。

### 「平岡拓晃選手」へ質問

柔道は男子六十キロ級の平岡拓晃選手が、日本勢で今大会初のメダルとなる銀メダルに輝いた。アナウンサーが「ロンドンのテレビスタジオには十分前に到着したばかりです。おめでとうございます」と言った。「ありがとうございます」。「だれに一番喜びを伝えたいですか?」「嫁ですね。まだ話していません。娘の顔も早く見たいです」。

東京のNHKスタジオの女性アナウンサーが、「どのような励ましのメールが届いていましたか?」と尋ねた。すると、平岡選手は「メール?」と言った。インタビュアーに追われてメールは、

まだ見ていないようだった。メールの事など忘れていたようだった。この状況では、落ち着いてメールを読んでいくわけがない。しかし、慌てず「メールは、たくさん来ていました」と言った。ところが、まだ理解できていないロンドンの方の女性アナウンサーが「どのような内容のメールでしたか？」と再び話題にした。「胸を張って帰って来い」「そうですね」。

私は、このやり取りにあきれた。銀メダリストが何を言うかを日本中の人が注目している。メールの個人情報など知りたくもない。NHKのアナウンサーも民放と同じレベルに落ちた。

このように、質問は答えるより、はるかに難しい。翌日の新聞で知った事だが、この階級には、オリンピック三連覇の野村忠宏が君臨してきた。北京オリンピックはその野村を倒しての代表だったが、全く体を動かさずそのまま無名の米国選手に敗れ、わずか一試合で終わった。心無い声は想像を超えた。「野村なら金を取っていた。何で平岡なんか出したんだ」。肉声やネット上の非難が容赦なく心を切り裂いた。引退が頭をよぎった時、一通のメールに救われた。「野村さんを出せば良かったと言う人は、お前の頑張りを知らないからそう言うんだ。気にするな。柔道やめるなよ」。差出人はシドニーオリンピック百キロ級金メダリストの井上康生さんだった。憧れの存在の井上選手の言葉が、すさんだ心に染み渡った。「銀メダルを取れたのは、北京の経験があったおかげです」。

### 「萩野公介選手」へ質問

競泳男子四百メートル個人メドレーでは萩野公介選手が銅メダルを獲得した。萩野選手は十七

歳の高校三年生。「予選からしつかりいって、日本記録が出た。決勝はメダルを狙える位置だったので、しつかりと自分の泳ぎを心がけようと思って頑張りました」「これがオリンピッククなんだな、夢の舞台なんだなと思いつながら、すごく楽しかったです」と言った。金メダルはライアン・ロクテ（米国）選手。銀メダルはペレイラ（ブラジル）選手。

ロンドンのスタジオリンタビューでは、女性のアナウンサーが開口一番「もう一人の『コウスケ』と言われる萩野公介選手においでいただいています。銅メダル、おめでとうございます」と言って紹介した。アナウンサーは平気な顔だった。金メダリストの北島康介選手と名前だけで比べられて嬉しいだろうか？ 私の場合、「あの美しい女優の吉永小百合と、よく間違えられます。私は、隣りに住んでいる池田小百合です。かわいらしさでは負けていません」と言うのと爆笑だ。次に、この女性アナウンサーは「春の○○大会では何秒、次の○○大会では何秒、そして○○大会では……五秒以上縮めましたねえ、初めてのオリンピック、緊張やプレッシャーは、いかがでしたか？」と、ペラペラしゃべりまくった。選手より先に質問をする人が、しゃべってしまったので、萩野選手は少ししか話さなかった。もつと、いろいろ聞きたかった。

### 「子ども」へ質問

アナウンサーが、「今の試合を見て、どうでしたか？」と子どもにマイクを向けた。「楽しかった」「嬉しかった」「すごかった」「かっこよかった」「頑張った」と子どもが言った。

夫が、「子どもに感想を聞くななんて、どうかしている。子どもにマイクを向けるんじゃない。

女の子ばかりじゃないか。男はどうした、男は」と怒った。「別にいいじゃないの」「オリンピッククなんて興味なし」。

夫は、ほとんど観戦しないまま平成二十四年のロンドンオリンピックは、閉幕した。私はオリンピックを楽しむんだ。カラーテレビの色は、あざやかできれいだった。特に町の中を走った男子マラソンは、晴天で、町全体と人々の笑顔が美しかった。若い人の活躍は感動だった。「ありがとう、ご苦労様」。

## 大騒ぎの一日

平成二十七年（二〇一五年）九月十九日、ラグビーの第八回ワールドカップ（W杯）イングランド大会で、日本代表（世界ランキング十三位）は、過去二度の優勝経験を持つ南アフリカ（世界ランキング三位）に三十四対三十二で逆転勝ちし、グループリーグB組の初戦を白星で飾った。ラグビーは肉弾戦で、がっしりした体格の選手が多ければ勝つて決まっているスポーツだ。番狂わせは少ない。しかし小さな日本人チームが勝つたのだから喜びは大きい。

テレビは一人で二十四点を挙げた五郎丸歩選手（ヤマハ発動機）の名前を連呼した。ペナルティーゴール、頼もしい右足が歴史的勝利を引き寄せた。二十二対二十九で迎えた後半二十八分、見方がパスで崩したのを見て勢いよく走ってトライ。直後、右サイドラインに近い位置から難しい同点ゴールキックも決めた。「オーツ、かっこいい！」私はラグビーを知らなかったが、感動した。

そして家で飼っている「アシダカグモ」に「五郎丸」と名前を付けたほどです。

しかし、テレビを観ていると、日本チームに外人の選手が多いのが気になった。主将はリーチマイケル（東芝）、そしてトンブソン（近鉄）、ブロードハーネスト（リコー）、ツイ（サントリー）、サウ（ヤマハ発動機）、マフィ（NTTコミュニケーションズ）、カーンヘスケス（サニックス）。これで、「日本が勝った。小さくても勝てる事を実証した」と言っているのだろうか。

ゴルフ・ANAオープン最終日、平成二十七年九月二十日、石川遼選手（二十四歳）が通算十六アンダーで優勝、優勝金二千二百万円を獲得した。

ボギーでも勝ちが決まる十八番パー四。第一打を右の林に曲げ、残り百七十五ヤードの第二打は安全な位置に刻むという選択肢もあったが、ブーメランのようなスライスでグリーンエッジまで運び、パーで締めくくった。

「これって最高、すばらしい。ワイー、遼くんは天才だよ！」興奮して叫ぶと、「小百合さんは、遼くんが好きなのですか」と夫が言うのが聞こえた。

## 野球

童謡の会で『みどりのそよ風』（作詞：清水かつら 作曲：草川信）を歌った。

「みどりのそよ風 いい日だね ボールがぼんぼん ストライク 打たせりや二塁の すべ

り込み セーフだ おでこの 汗をふく」。

歌っている内に、昔、黒柳徹子さんが言った言葉を思い出した。……「あたくしは、スポーツを観戦するのは好きですが、自分ではあまりやりません。一番不思議なのは、何といても野球ですね。あんなに速いボールを、あんなに細いバットの芯でとらえるなんて神業としか思えませぬ。ホームランだなんて、すごいですね。打った人は、みんな右の同じ方向に走って行きます。あたくしは、不思議で仕方がありませんでした。なぜ、左の方へは走らないのでございませうか。みなさまは御存知でしたか。あれは一塁、二塁、三塁と、回るように決まっていますんでね」と。

「私も、その口です。スポーツ観戦は好きですが、よくわかっていない。黒柳さんと話したら、どうなるでしょうね」と言うと、童謡の会場は爆笑になった。涙を流して笑っている人もいた。